

経済学研究のしおり(4)経済学部学生のための 学習案内 社会経済学：ヴァーチャル・ゼミ ミ もう一つの経済学は可能か?!

SATO, Yoshikazu / 佐藤, 良一

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

75

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

241

(終了ページ / End Page)

267

(発行年 / Year)

2007-10-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003086>

【経済学研究のしおり（第四回）】

社会経済学：ヴァーチャル・ゼミ
もう一つの経済学は可能か?!

佐藤良一

Y：最近では経済学よりも経営学・法学といった実学に関心を寄せる人が増えている。そのこと自体は責められるべきではないのだけれど、例えば、経済学は数学みたいなものだから数学嫌いの私には無理といった「誤った理解」をして経済学を「学ぶ選択肢から排除」してしまう人が多いらしい。そこで、今日は、少しは誤解を正して、経済学に興味をもってもらいたいと願いつつ、経済学も〈多様なんだ〉ということをKei君（仮名：“Keizaigaku”から”Kei”）とEmiさん（仮名：“Economics”から”Emi”）と一緒に考えてみたい。二人は初対面だから、最初に簡単に自己紹介してくれるかな。

Kei：経済学部三年生です。Y先生のゼミで、経済学の基礎理論を勉強していて、自分の研究テーマとして「企業が果たすべき〈社会的〉役割」といった辺りを考えています。三年生になって、公務員試験を受けようか、それとも大学院に進学しようか、と考え始めているところです。

Emi：経済学部一年生。Y先生の一年生向けの講義を受けています。経済学を始めたばかりでほとんど何もわかっていません。でも、いろいろなことに好奇心旺盛です。将来の夢として、…。できれば、国際機関に就職して、国際貢献の一端を担いたいと思っています。途上国の貧困とか、NPO、NGOの活動とか、に関心をもって勉強中です。ヨロシク！

●もう一つの世界は可能だ!

K: 今日のテーマ「もう一つの経済学は可能か」は、例の世界社会フォーラム (WSF: World Social Forum) の合い言葉「もう一つの社会は可能だ (“Another world is possible!”) の言い換えですね。¹⁾

E: 世界社会フォーラムって?

K: 2001年1月に第一回が開催された市民フォーラム。²⁾ 現在のあり方とは違う社会をどのようにすれば作り上げられるかを考えようとしている。このフォーラムは、世界経済フォーラム (WEF: World Economic Forum) に対抗している。スイスのダボスで開催されているので「ダボス会議」とも呼ばれているのだが、現在のグローバル社会を牛耳っている人々の集まりがWEFです。それにたいしWSFは反グローバリズムのフォーラムということになるかな。

Y: なかなか良く知っているね。そういう社会運動の基礎になっている考え方、とくに今日は経済理論が話の中心になるわけだけど、手始めに…。「現代日本は〇〇社会である」というときに、この〇〇にどんな言葉が入ると思うかな?

K: そうですね。よく言われているのは「格差」社会。あとは、「高齢化」社会、「二極化」社会、「情報」社会、…。

Y: Emiさんはどうですか。

E: 同じことになるかも知れないけど、私の言い方をすれば、「弱肉強食」社会、「勝ち組と負け組」社会、「不安定な」社会。

Y: 割とネガティブな表現になってしまうね。内閣府は、毎年「社会意識

1) William F. Fisher and Thomas Ponniah eds. *Another world is possible: popular alternatives to globalization at the World Social Forum*, [with a foreword by Michael Hardt and Antonio Negri], London: Zed Books, 2003 (加藤哲郎監修『もうひとつの世界は可能だ: 世界社会フォーラムとグローバル化への民衆のオルタナティブ』日本経済評論社, 2003年)

2) 世界社会フォーラムの公式HPと日本連絡会HPも参照のこと。

<http://www.forumsocialmundial.org.br/>

<http://network.socialforum.jp/xoops/>

3) 内閣府「世論調査」(<http://www8.cao.go.jp/survey/index-sha.html>) を参照。

に関する世論調査」を公表している。³⁾ これを見ると人々の「感じ方」の変化がよくわかるのだが、最新の調査（2007年1月）からいくつかの数字を紹介してみよう。現在の世相（明るいイメージ）の上位2位は「平和である」「安定している」になっている。20年ほど前は、40%弱の人が「安定している」と考えていたのが、最近では20%弱へと半減している。悪い方向に向かっている分野では「教育」が36.1%で第1位、前年に比べて、12.3%も上がっていて、最近ではもっとも高くなった。「国の政策に民意が反映されているか」という項目でも、75.3%の人が「反映されていない」と回答している。全体として判断すれば、人々の「思い」は必ずしも良い方向に向かっていないようだね。どこかで、「変わって欲しいな」と思っているのかもしれない。WSFの日本版が謳っているように、“Another Japan is necessary!”

●一枚の絵

Y：人々の「思い」あるいは「感じ」を受け止めて、なにを、どのようにすればいいのか、に明確な解答を与えねばならないのだが、言うは易く、…。今日のところは、性急に解決策を示すと言うよりは、現在の経済学がどんな状況にあるのか、どのように学んでいけばいいのか、を、これから学び始める学部1年生を念頭に考えいくことにしましょう。Kei君は、すでに基礎的学習を終えているわけだから、先輩としてのアドバイスをして欲しい。だから、Emiさんには1年生の代表(!)として、遠慮しないで、積極的に質問してくれると嬉しいな。

E：わかりました。学部のシラバスを読むと、マクロ経済学、ミクロ経済学、社会経済学、…、△△経済学がたくさん並んでいるのですが、雑然としていて、それぞれの関連がつかみにくいんです。どういうふうに整理したらいいんですか。

K：一つの整理の仕方は、「理論・政策・歴史」。

Y：たしかに、そういう言い方ができるね。今日は、その三つのなかの理

論分野を中心に考えていってみよう。さて、ここに「ひまわり」の絵（といっても、本物ではなく、ポストカードなのが残念！）がある。一応、本物の絵だと想像してもらおうことにして、最初に思い浮かぶ「問い」はなんでしょうか。

K：たしかその絵は、某保険会社が約58億円で購入してずいぶん話題になったんじゃないですか。そんなことを思い出したからというわけでもないですが、無料なボクは、「いくらで買えるのかな」「いくらで売れるのかな」と考えてしまいますね。テレビ番組に「なんでも鑑定団」があるでしょう。いろいろな人（鑑定依頼人）が出てきて、いくらになるかを鑑定してもらう番組ですが、あの番組のノリです。

E：高尚ぶるわけでないけど、私はそんな風には考えないわ。ゆったりと眺めて、絵から感じられる、…、うーん、なんというか、そのままを味わいたい。興味がわかれば、その絵を描いた画家の人生、その絵が描かれた時代背景などを調べ、もっともっと、絵を深く理解したいと考える方ですね。Keiさんの真似をして、テレビ番組で言えば、NHKの「新日曜美術館」かな。

Y：二人はけっこう対照的なんだな。「鑑定」と「鑑賞」の違い。もちろん、鑑定するには、鑑賞する力も求められるけど、対比すればということですよ。それでは、つぎの絵を見てごらんください。何が描かれているでしょうか。⁴⁾

E：この絵は、たしか「心理学」の授業で見たことがある気がする。そうだな。互いに向き合っている二人の顔だったかな。Kei先輩には何が見えますか。

K：白い壺。下のところに模様があって、上が広がっている壺ですね。

Y：これは「多義図形」と言われているものの一つで「ルビンの壺」と呼

4) 図はNTT Communication Science LaboratoriesのHPから引用。
<http://www.brl.ntt.co.jp/IllusionForum/menu-j.html>

ばれている。1921年にルビンが発表した「盃と顔図形」がもとになっている。二人が答えたように、この絵には二つの情報（二人の顔と壺）が含まれているわけだね。視点に応じて、顔に見えたり、壺に見えたりする。



E：経済学の理論について話しているじゃないんですか。絵の話題が続いていますが、どういうことなんですか。

Y：同じものを見ても、人によって、見方、考え方が違うということ。あるいは見方（社会を覗るメガネ）の違いによって、見え方が異なってくると言った方がいいかな。種明かしをすれば、この「多義図形（だまし絵）」を用いて説明するというアイデアは、コーン『マクロ経済学再入門：批判的アプローチ』から得たものです。なかなかおもしろいな、と思って、ここで紹介してもらいました。⁵⁾ さっき、日本は〇〇社会の空欄を埋めることをやってみたけど、人によって解答はさまざま。この「さまざま（多様さ）」ということの大事さに気づいて欲しかったわけです。

K：でも、社会をどのように理解するか、という問題と、絵をどのように観るかは、質的に違うと思います。

Y：なぜそう思うのかな。

K：絵は一つの完成したモノであるのにたいして、社会の場合は、観察者というか、分析者もそのなかで生きている。観察者自身が観察されるモノの一部に含まれている。だから、社会を仕組みに不合理な点があれば、それを「変える」こともできる。

Y：Good point!

5) Cohnは多義図形（婦人と老婆）を一つの例として、経済学における捉え方の違いを説明している。そこでは、知識の二つのモデル（the “blank slate” theory of knowledge, the “paradigmatic” or gestalt theory of knowledge）を対比しながら認識方法の差が解説されている。S. M. Cohn, *Reintroducing Macroeconomics: A Critical Approach*, M. E. Sharpe, 2007. を参照のこと。

●社会をどう見るか

Y：言うまでもないが、経済学も「社会」科学の一つだから、社会を分析することを目的としている。さて、「経済学がどのように定義されているか」を復習することから始めてみよう。

E：私の電子辞書に入っている『広辞苑』（岩波書店）では、「(political economy; economics) 経済現象を研究する学問。旧称、理財学」となっています。

Y：ついでに「経済」も調べてご覧なさい。

E：はい。三つの意味があります。「① [文中子 (礼楽)] 国を治め人民を救うこと。経国済民。政治。② (economy) 人間の共同生活の基礎をなす財・サービスの生産・分配・消費の行為・過程、並びにそれを通じて形成される人と人との社会関係の総体。転じて、金銭のやりくり。→理財。③ 費用・手間のかからないこと。儉約。」

Y：最初の説明は経済学の語源(経国済民)に関係している。英語のeconomyの語源は、ギリシア語のoikos-nomosに由来する。oikos (家)+nomos(管理・法)、つまり家の管理、家計とすることだね。英語のeconomyも日本語の経済も、儉約という意味をもっているけど、家計にとっても、経国済民にとっても、生産する能力が低い時代には、儉約が第一だったことを反映している。

K：そうすると、二番目の意味が経済学の「内容」を指していることになるけど、もう少し言葉を加えた方がわかりやすいですね。国語辞典だから、これで十分と言えば、十分ですけど。

Y：今日のテーマにあるように、経済学は「唯一」ではないという点が議論の要点だから、最初に経済学者自身による代表的な「定義」を紹介して、それをめぐって意見交換をするというように進めてみよう。ロビンズ(L.C.Robbins: 1898-1984)の定義が有名です。

「経済学は、諸目的と(それを達成するための)代替的用途をもつ稀少な諸手段との間の関係としての人間行動を研究する科学である。」

“Economics is the science which studies human behaviour as a relationship between ends and scarce means which have alternative uses.”⁶⁾

K：ボクが公務員試験を受けるために勉強している『ミクロ経済学』のテキストも同じようなことが書いてあった。「経済学とは、稀少な財やサービスを、競合する目的のために選択・配分する仕方を研究する学問」ということができます。⁷⁾

E：要するに高校生の時にも勉強した需要曲線と供給曲線の交点で価格が決定される、という話ですか。

Y：人間の欲望は無限だが、それを満たすものは限られている。どのように「選択・配分」したらいいのか、は基本中のキホンということになる。先ほど、一枚の絵をどうみるか、という問いをとおして、「鑑定」と「鑑賞」の違いを考えた。そこで、絵の市場をつぎのように想定してみよう。供給されるのは花子さんが所有している「一枚」の絵。花子さんはできるだけ高く売りたいと考えているが、売ることが目的。この絵を欲しい／需要する人が三人（太郎、次郎、三郎）いる。絵が欲しい理由、年齢、性別、美術の造詣の深さ等々、三人を特徴づける要素はいろいろあるけど、売買にとっては「いくらまでなら購入できるか」だけが問題になる。そこで、つぎのような数値例を前提してみよう。

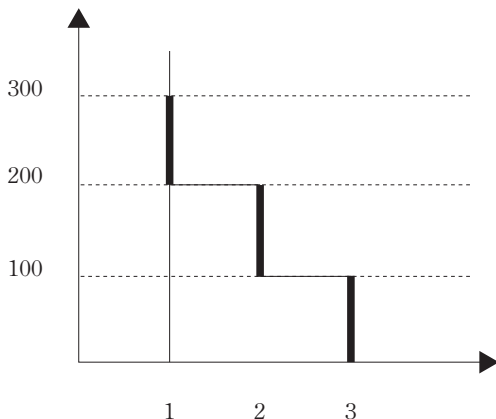
価 格	供給者	需要者
200万円以上300万円以下	花子	三郎
100万円以上200万円未満	花子	次郎, 三郎
100万円未満	花子	太郎, 次郎, 三郎

図に描いてみるとどうなるかな。供給は「1」だから、どんな価格になろうとも増えることも減ることもない。「1」を起点とする細い垂直線が供

6) L. Robbins, *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 1932, 2nd ed, revised and extended, 1952, p. 16 (辻六兵衛『経済学の本質と意義』東洋経済新報社, 1957年, p. 25)

7) 西村和雄『ミクロ経済学入門 (第2版)』岩波書店, 1995年, p.2

給曲線になるね。需要曲線は、階段状のグラフになる。というのは、100万円未満のどんな価格でも需要は「3」なので、0円から100万円までの垂線になる。同じように考えていけば、階段状の需要曲線が描けることがわかる。



さて、「均衡」価格はどのように決定されるかな。100万円未満の価格であれば、三人とも購入可能なので、供給量1に対して、需要量3、したがって超過需要が存在している。超過需要があれば価格が上昇するという「価格メカニズム」が働いて、価格は上昇。かりに150万円になれば、購入可能者は二人。でも、供給は1しかないなので、さらに価格は上がる。200万円以上300万円以下であれば、三郎だけが購入できるのだが、最終的な価格はどうなるだろうか。花子はできるだけ高く（300万円）売りたいし、三郎はできるだけ安く（200万円）買いたい。となると、最後は二人の間の「交渉」で決まることになるろう。「価格メカニズム」をとおして需要と供給が一致するという意味での『均衡』が達成されることになるわけですね。

でもこのメカニズムの「裏側」を見てみると「均衡=望ましい」とは言えなくなる。

E：どうしてですか。

K：市場取引が開始されたときの状態と取引が実現する状態を比較してみたらどうなっているかを考えてみればいいんじゃないかな。

Y：太郎、次郎、三郎の三人とも絵を手に入れたかったわけだね。でも、三人には自由に使える金額に差があった。所得格差、資産格差があって、例えば、太郎は100万円以上は支出できない。だから、150万円の価格になれ

ば、太郎は購入を断念しなければならぬ。いいかえれば、市場から排除されてしまう。均衡が成立する過程は、所得の低い人間を排除する過程でもあるわけだね。市場の裏側で起きていることを表にしておこう。

価 格	排除される者
200万円以上300万円以下	太郎, 次郎
100万円以上200万円未満	太郎
100万円未満	---

E: こう考えると、市場メカニズムって、ピミョウに残酷な面があるのね。

K: でも、そもそも供給を上回る需要がある場合に、価格メカニズム以外にどんな方法があるんですか。

Y: 数が限られているものを分ける方法。例えば、行列（早い者勝ち）、くじ引き、暴力（腕力が強い者が勝つ）、もっとも恵まれていない者を最優先、高齢者を優先、年少者を優先、…。いろいろと考えられる。

K: でも結局は、「誰か」が排除されることは変わらないわけですよ。

Y: そうだね。そこが問題なわけだ。ラーナー（Abba Lerner）という経済学者がこんなことを言っているのを知っているかな。

「経済取引は解決済みの政治問題である。経済学は『解決済み』の政治問題をその領域に選ぶことで社会科学の女王という称号を得た。」

“An economic transaction is a solved political problem. Economics has gained the title of queen of the social sciences by choosing *solved* political problems as its domain.”⁸⁾

E: 「社会科学の女王」だなんて?!

K: 『解決済み』の政治問題。先の例で言えば、三人がどのような差異をもっているかは問題としない、というか、すでに『解決済み』として需給の不一致を解消する方法を検討する、ということなのかな。上の引用文の前で、

8) A. P. Lerner, “The Economics and Politics of Consumer Sovereignty,” *American Economic Review*, 1972, p.259.

「特に私が強調したいことは、本質的に解決は『対立』を政治的『問題』から経済的『取引』への転化である、ということである。」

“What I want particularly to stress is that the solution is essentially the transformation of the *conflict* from a political *problem* to an economic *transaction*.”

と述べているから、たぶん間違いないな。

Y：ここでは価格が変わっても供給が変化しない場合を考えただけ、実際には供給量は変化できる。取引されている財のほとんどはそういう性格をもっていると言えるね。だから、「排除」の側面だけを強調しすぎると、バランスを欠いた市場観になってしまう。価格がシグナルとなって、人々が欲している財の需給が調整されているのも事実。問題は、どこまで市場に任せるか、と言うことかな。『排除』と『共生』のバランスってところが大事。

● 「問題」を考える

E：でも、経済学を「選択」問題に帰着させてしまうのは、ちょっと狭すぎると思うな。社会科学には経済学だけでなく、法学、政治学、経営学、社会学などがあって、それぞれが学問の上で分業しなければならないのはわかるんだけど、…。

Y：どのような経済学を構想するかは、なにを問題にするかと深く関わっていることは確かですね。

K：経済理論は大づかみに言えば、新古典派経済学と政治経済学、正統派と異端派、主流派と反主流派の二つに分かれる。政治経済学といったけど、人によっては社会経済学と呼んでいる。英語にしまえば、どちらも *political economy*。というよりは、もともとはみんな *political economy* だったのが、一部が *economics* として分化していったとも言える。いずれにしろ、*political economy* の内容を簡単に解説してもらえば、Emi さんの不満も多少は解消される。

Y: O.K. それでは、これから political economy に分類されるアメリカのラディカル・エコノミックスを採り上げて、経済学をどのように考えているかを検討していこう。ここでは、主にボウルズらが書いたテキスト『資本主義を理解する』⁹⁾にもとづいて進めていきましょう。経済学のテーマは選択問題ではなく、あくまでも資本主義だということ。このことが最初に確認されなければなりませんね。

「政治経済学は資本主義自体と発展し変化する資本主義を理解する方法である。」

“Political economy is a way of understanding capitalism that has evolved and changed along with capitalism itself.”¹⁰⁾

最近では、資本主義という表現は好まれずに、市場経済と言われることが多い。おそらく旧ソ連の瓦解(!?)は、かつての体制間競争に社会主義システムが敗北したことの象徴であって、いまや世界に存在しうる社会システムは市場経済以外にないという認識が反映しているのでしょうか。でも、日本でも良く知られている経済学者ハイルブローナー (R. Heilbroner)¹¹⁾もつぎのような言葉を残している。

「経済学でもっとも保持されている秘密は経済学が資本主義を研究する、ということである。」

“The best kept secret in economics is that economics is about the study of capitalism.”¹²⁾

9) S. Bowles, R. Edwards and F. Roosevelt, *Understanding Capitalism: Competition, Command, and Change*, 3rd ed., Oxford U.P. 2005.

10) Bowles *et al. op. cit.* p.71

11) 例えば、Robert L. Heilbroner, *Behind the veil of economics: essays in the worldly philosophy*, 1st ed New York: W.W. Norton, 1988. (八木甫訳『隠された経済思想：資本主義経済の本質を求めて』HBJ出版局, 1991年), Robert L. Heilbroner, *The worldly philosophers: the lives, times, and ideas of the great economic thinkers*, [5th rev. ed.] Harmondsworth; New York: Penguin, 1983. (八木甫他訳『入門経済思想史：世俗の思想家たち』ちくま学芸文庫, 2001年)

12) T. I. Palley, *Plenty of Nothing: The Downsizing of the American Dream and the Case for Structural Keynesianism*, Princeton U.P. 1998, p.15.

E：資本主義の歴史は結構長いけれど、そのシステムの基本的性格はどのように捉えられているのですか？

Y：資本主義も経済システムの一つであること、そしてそれは次のように定義されている。

「資本主義は資本財を私的に所有している雇用主が利潤獲得を求めて諸商品を生産するために賃金労働者を雇用する経済システムである。」

“Capitalism is an economic system in which employers, using privately owned capital goods, hire wage labor to produce commodities for the purpose of making profit.”¹³⁾

K：要点を箇条書き風に言い直せば、(1) 資本主義は一つの経済システムであること、(2) 生産をするための手段（ここでは「資本財」）が私的に所有されていること、(3) 生産は利潤を目的におこなわれること、(4) 労働を担うのは賃金労働者であること、(5) 生産物は商品として生産されること、といったところですね。

E：選択問題に帰着できないということと、あくまでも資本主義が分析対象だということ。二つの関係というか、違いが今ひとつ、…。

K：人はどれだけ働くか、という問題を考えてみよう。どんな人でも一日に与えられているのは24時間。寝なければならぬし、食事もしなければならぬし、というように生きていくためには、必要不可欠な時間があるね。それらを24時間から差し引いた時間数を T としよう。自分では増減できないという意味で、制約（＝稀少）になっている。これを「働く（＝労働を供給する）」時間（ N ）と「働かない（＝余暇）」時間（ L ）に配分する。働けば、時間当たり賃金 w が得られて、それを元手にして、 p 円の財を C だけ買える。

E：Kei先輩の公務員試験勉強の成果ですね。

Y：茶化すのはやめて、もう少しKeiくんの説明を聞こう。

13) Bowles *et al. op. cit.*, p.129

K: えーと、これまでの関係を式で表すと、 $T = L + N$ そして、 $wN = pC$ となつて、最初の式を使えば、余暇時間と購入できる財の量が満たさねばならない式が得られます。

$$w(T - L) = pC \text{ あるいは } pC + wL = wT.$$

Y: ここで、価格 p 、賃金 w 、利用可能な時間 T は与えられているから、選択できるのは、財と余暇。たくさん財を消費しようとするれば、余暇時間は減ってしまう。財をとるか、余暇をとるか、それが問題だ!

K: どういう風にして「最適」な組み合わせを選んだらいいかを考えると、登場するのが効用関数。財の量は増えれば、効用（満足度）は高まるし、余暇も増えれば、効用は高まる。財の量と余暇時間がどのように効用を決めるかを示すのが、効用関数 $U = U(C, L)$ です。

E: 先ほどの制約を満たす C と L の組み合わせの中から、効用を最大化するものが選ばれるというわけです。そして最適な L^* が決まれば、労働供給量 $N^* = T - L^*$ も決まる、と。

K: はい、良くできました。

Y: 先ほどの経済学の定義に即して言い直してみると、「限られた時間（＝稀少な財・資源）を、財の量を増やすか、余暇時間を増やすか（＝競合する目的）のために選択・配分する仕方」を検討したことになるわけです。さらに言えば、与える賃金率が異なれば、「最適」な労働供給量も異なってくる。さまざまな賃金率と労働供給の関係を示したのが、労働供給曲線になるわけですね。

E: 数学の苦手な私にとって、途中難しいところもあったけど、経済学はけっこう「選択」問題なんだ、というのはなんとなくわかった。労働供給のモデルは、あとで『ミクロ経済学』のテキストで復習しておこう。

Y: 経済学のテーマは資本主義なんだと考える経済学の目から、ここまでの議論はどのように評価されるのかな?

K: 労働を担うのは賃金労働者。生産するための手段をもっていないし、生きていくために必要なさまざまな財はすべて商品になっていて、それらを手

に入れるためにはお金が必要だとしたら、どうしたらいいだろう。〈何か〉を売って得た貨幣で必要な商品を買わざるを得ない。

E：なにかって？

Y：それが労働力。労働力も商品になっている社会が資本主義だと言うことだね。財と余暇の最適な組み合わせを考えて、どれほど働くかを考える余裕なんかないわけだ。どんな社会であろうと、モノを生産しなければ、社会は存続できない。その時に、そのモノがどのように生産されているか。言い方を変えれば、社会が再生産されるためには、どんな条件が必要か。その条件が資本主義システムではどのように満たされているのか、というふうに考えるわけだね。

K：この話は、難しく言えば、経済学方法論につながってくる。

Y：資本主義を理解するためにどのようにアプローチすればいいかという問題です。

●資本主義を「理解する」方法

E：学問の方法って言うと、難しそうです。

Y：そうだね。でも、どんなことでも、何かをしようと思えば、方法を知る必要がある。例えば、スポーツ競技でも、囲碁・将棋でも、「〇〇必勝法」なんていうものがある。でも、指導者によって、その方法はまったく違う場合もある。資本主義をどのように理解するか、についてもさまざまなアプローチの仕方があって、全員が一致して同意する方法があるわけではない。

K：社会をどのように解釈するかを〈争う〉わけだから違うのが当然だと思います。

Y：キーワードを「3 (three)」にして具体的に説明しよう。ラディカル派の「三次元アプローチ (Three dimensional approach)」、
「存続、再生産、移行」という三つの視点、それから宇野派と呼ばれる人たちの「三段階論」。

E：経済学の考え方は、必ず「3つ」のポイントがなければならぬとい

うことなの。

K: そんなことはないよ。あくまでも、代表的な考え方を挙げれば、と言うこと。三次元アプローチなんて、初めて聞いたけど、どういう考え方ですか。

Y: さっきも注意したように、単なる市場経済ではなく、あくまでも資本主義が問題だったね。そうすると、次の三つの面から資本主義システムを分析しなければならない、と言うんだ。最初の面が、「水平次元:競争 (a horizontal dimension: competition)」¹⁴⁾、次が「垂直次元:支配 (a vertical dimension: command)」¹⁵⁾、そして最後が「時間次元:変化 (a time dimension: change)」¹⁶⁾。全部を丁寧に説明する余裕はないから、もっとも特徴的な二番目について具体的に解説しよう。例えば、会社のなかでどのように仕事がおこなわれているか、考えてみよう。職場にはさまざまな立場の人たちがいるね。Kei君が就職した職場で、こんなふう上司に言われたらどうするだろう。「急で悪いんだけど、残業して、この仕事を片づけてくれないか」。まずいことに、その日は久しぶりに彼女と映画を観て、食事をする約束をしていたとする。

K:「残業するか、それともデートにでかけるか。それが問題だ!？」まるで、ハムレット状態。

E: いずれかを選ぶか、と言うことだから、単なる選択問題とも言えそうだけど。

K: そんな簡単ではないよ。やっぱり、雇われているわけだし、無下に断れないし、かといって、「ドタキャン」して彼女を怒らせたならそれこそ大問題だし、…。

14) “**Competition**, or the horizontal dimension in economics, refers to aspects of economic relationships in which voluntary exchange and choice among a large number of possible buyers and sellers play the predominant role.” Bowles et al. 2005, p.54

15) “**Command**, or the vertical dimension in economics, refers to aspects of economic relationships in which power plays the predominant role.” Bowles et al. p.54

16) “**Change**, or the time dimension in economics, refers to the historical evolution of people and economic system.” Bowles et al. p.55

Y: 会社のなかの人間関係も階層。命令/支配・従属の関係が成立しているようだね。結局、Kei君は残業してしまうタイプかもしれないね。これは、比喩的な話だけど、資本主義では、こういった〈権力関係〉が成立して、それがとても重要な役割を果たしている。¹⁷⁾だから、垂直次元の分析抜きに資本主義は語れないというのがラディカル派の立場というわけだ。

E: 二つ目の「三つの視点」という方法はどのようなことでしょうか。

K: 存続、再生産、移行と聞くと、正統派マルクス経済学っぽい感じがしますね。

Y: たしかにそうだね。ここでは、数理マルクス経済学のパイオニアとして世界的に知られている置塩信雄さん(1927-2003)の経済学観を話しておこう。ある特定の経済社会、例えば資本制経済を分析する際に、以下の7つの課題を事実に基づいて理論化しなければならないと主張している。

(課題1) そのような特徴をもつ生産関係が定着し、機能し得るためには、どのような歴史的段階に人間社会がなければならぬか

(課題2) 資本制経済を特徴づける生産関係は何か

(課題3) その生産関係に規定されて、人々はどのような経済活動をおこなうか

(課題4) 人々のそのような経済活動の合成結果として、どのような経済現象(交換、貨幣、賃金、利潤、景気循環、失業など)が生ずるか

(課題5) こうして生ずる諸種の経済現象は、互いにどのような相互関連性をもつのか

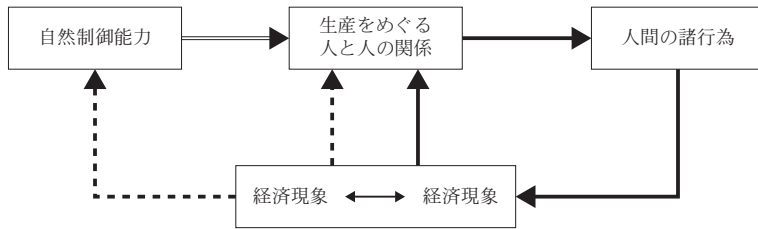
17) 権力は主として政治学の研究テーマと考えられているけど、AがBにたいして権力(power)をもつとは次のような事態を指している。Bにたいして費用を賦課することによってAの利益になるようにAがBを行動させることができる。具体的にAを雇用主、Bを労働者とする。雇用主の命ずるように労働しないと解雇されてしまう状況を考えればよい。「解雇」という労働者にとっての「費用/犠牲」を賦課することで、雇用主にとって利益になるように「命ずるまま」に労働者に労働させる。雇用主は労働者にたいして権力をもっている、と。

18) 置塩信雄『現代資本主義と経済学』岩波書店、1986年、pp.8-9。同著『経済学は今何を考えているか』大月書店、1993年、p.70。

(課題6) これらの経済諸現象は、これらを引き起こす基礎であるこの社会を特徴づける生産関係を維持し、持続させるように、どのように作用するか

(課題7) これらの経済諸現象が、この社会を特徴づける生産関係を廃棄し、止揚して、新しい生産関係を生み出す諸条件を醸成するようにどのよう作用するか¹⁸⁾

そして、これら7つの問題は、特定社会の存立根拠の視点(課題1)、社会の再生産メカニズムの視点(課題2~5)、他の社会形態に置き換えられる移行の視点(課題6, 7)の三つに整理集約される、というわけだね。諸課題の関連を図解しておこう。

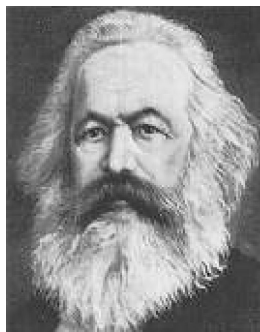


K: 僕が理解している限りで、言い直してみましようか。資本主義システム、というよりは資本制経済と言った方がいいかな、が存続しうるための自然制御能力の上限と下限は何によって規定されるかをまずはっきりさせる。今度はそこで成立している資本制的生産関係(人と人の関係)を所与としたときに、どのようにして社会的再生産が可能なのかを明らかにする。太い実線で描かれている「円環」が再生産メカニズム。変動を孕みながら、生産を繰り返すなかで、社会の存立条件(自然制御能力)が変わり、既存のやりかた(生産関係)と矛盾するようになり、「新しい」社会形態に移行せざるを得ない。「円環」だから、出発から運動を始めてぐるっと回って出発点に戻る、と言うイメージなのだが、同一平面上をぐるぐる回っていると言うよりは、螺旋階段のように少しずつ上方に移動している趣があるけど、正しいかどうかわかりません。したがって、経済学は、これら三つ、

存続・再生産・移行をすべて理論化しなければならぬ。

Y: よくできました。

E: 言葉遣いが難しく、なかなか馴染めない感じがしてしまいますね。ラディカル派経済学にしても、置塩経済学にしても、その中心にはマルクス(1818-1883)がいると言っても間違いじゃないですよ。そのマルクス本人は経済学の課題をどんな風に考えていたのですか。



Y: これはとても大きな問題が提起されてしまいました。ここにもってきたのは、マルクスが1867年に出版した『資本論』第一巻。第1版序文にこんな文言がある。

「近代社会の経済的運動法則を明らかにすることはこの著作の最終目的でもある。」¹⁹⁾

「この著作で私が研究しなければならないのは、資本主義的生産様式であり、これに対応する生産関係と交易関係である。その典型的な場所は、今日までのところでは、イギリスである。」²⁰⁾

E: そう言えば、宇野派の三段階論というのはどうなったの。

K: じつは、いま引用されたマルクスの文言に深くかかわっているんだ。宇野弘蔵(1897-1977)という経済学者は、マルクス経済学のビッグネームであり、『資本論』を批判的に読み込んで新しく「三段階論」と呼ばれる方法を提起したことで有名なんだ。宇野弘蔵は、研究対象と抽象次元の差に基づいて、経済学の全体系を原理論、段階論、現状分析の三分野にわけて、研究を進めるべきだと主張したわけです。²¹⁾ポイントの一つは、「近代社会

19) 『資本論』国民文庫(第一巻第一分冊), 大月書店, 1972年, p.25。

20) 『資本論』国民文庫(第一巻第一分冊), 大月書店, 1972年, p.23。

21) 宇野弘蔵『経済学方法論』東京大学出版会, 1962年。宇野弘蔵の経済学については『宇野弘蔵著作集(全10巻)』岩波書店, 1973-74年を参照。

の経済的運動法則」と言うときに「移行」の問題も含めることが果たしてできるのか、あるいは含めるべきか、ということなんだ。

Y: Kei君は公務員試験の勉強ばかりしているのかと思ったら、そうでもないんだね。公務員になるよりは大学院に進学して研究者を目指した方がいいかも知れないよ。Kei君の言ってくれたことを置塩の立場から言えば、存続と再生産の問題に経済学の対象を限定しようとしているのが宇野派経済学と言うことにもなる。²²⁾経済学方法論に少し時間を割き過ぎてしまったから、今日のテーマ「もう一つの経済学は可能か」の本筋に戻ることしよう。²³⁾

●二つの経済学

E: もう一つと言っておきながら、三つのアプローチについて説明してもらったけど、これらに共通することは、経済学の対象を「市場経済」ではなく「資本主義経済」とすることかな。最初の方で、Kei先輩が経済学を大づかみに二つに分けると、正統派と異端派、あるいは新古典派理論と政治経済学と言ったけど、ここで説明された三つのアプローチはいずれも政治経済学に属すということね。

Y: これまで話題にしてきたことを整理して表にしてみよう。

もちろん、これで対比すべき点をすべて尽くしているわけではないけど、新古典派経済学とは違う「もう一つの経済学」が備えている特徴は理解できると思うけど、どうかな。

K: ラディカル派の三次元アプローチから新古典派経済学を観れば、支配の問題も、変化の問題も十分に採りあげていないから、言ってみれば、水

22) 置塩と宇野派の考え方の相違を知る上では、置塩信雄・伊藤誠『経済理論と現代資本主義: ノート交換による討論』岩波書店、1987年 が参考になる。

23) 新古典派と異端派との対比について、例えば、Marc Lavoie, *Foundations of Post-Keynesian Economic Analysis*, Edward Elgar, 1992 (Table 1.1 Presuppositions of the neoclassical and the post-classical research programmes, p.7) Lichtenstein, Peter M., *An introduction to post-Keynesian and Marxian theories of value and price*, 1983. (川島章訳『価値と価格の理論』日本経済評論社、1986年)などを参照。

	新古典派経済学	政治経済学：〈もう一つの経済学〉
理論の焦点	交換	労働・生産・分配
主要分析対象	市場	企業・市場・家族・政府
権力行使	存在しない	中心論点
経済的帰結	市場で決定	集団間/主体間の交渉をつうじて決定
主要な価値	効率性	効率性, 公平性, 民主主義

平次元に偏った「一次元」経済学と言うことになる。

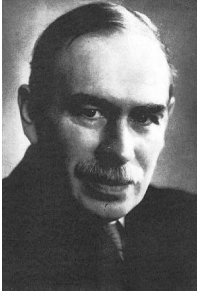
E：それでは、存続・再生産・移行の三つの視点，7つの課題という考え
方から判断すれば，課題3と課題4だけを分析している狭い経済学と言う
ことになるわけね。「政治的に解決済みの問題」だけをとりあげてエレガ
ントな理論をつくりあげて〈社会科学の女王〉になったことが果たしてよか
ったのかな。何が起きているのか，をまったく知らない〈はだかの王様〉
にはなりたくないわ。

Y：誤解を生んでも困るので，実証経済学と規範経済学という区別にも触
れておこう。「である」の問いを採り上げるのが実証経済学（positive or
scientific economics）であって，「べきである」にかかわる問いを検討す
るのが規範経済学（normative or policy-oriented economics）です。主流派と
いえども，価値判断につらなる問題群を検討していることは事実です。で
も，問題は果たして，実証と規範をきれいに切り分けられるかということ
ですね。

E：例えば，賃金の問題。女性の賃金がどれほどの大きさか，を調べるの
は「実証」経済学の問題。同一の仕事をしているときには，性の違いに関
係なく同一の賃金が支払われるべきであるか否か，は「規範」経済学の問題，
と言っていいでしょうか。

K：そうだね。だいたいいいんじゃないかな。ところで，経済学を二つの
領域に分けるとき，ミクロ経済学とマクロ経済学にすることが当たり前
になっていますね。

Y：たしかにそうですね。新古典派という場合には，教室で教えられる内



容では『ミクロ経済学』にあたります。マクロ経済学は、ケインズ（1883-1946）が始祖となるわけです。1936年に刊行された『貨幣、利子および貨幣の一般理論』がマクロ経済学の基礎になっている。ここまで、話を広げると新古典派とケインズ経済学の〈関係〉はどのように捉えられるか、という〈もう一つの経済学〉も検討しなければならなくなります。

じつは、政治経済学のなかにもミクロとマクロがあるんですよ。今日の話の中で参考にしてきたボールズらのテキスト『資本主義を理解する』は四部構成になっています。第1部政治経済学、第2部ミクロ経済学、第3部マクロ経済学、第4部結論。第4部は「資本主義の将来」と題された一つの章だけです。マクロ経済学となっても、ケインズ・モデルの解説ではなく、不平等、貧困、失業、インフレ、マクロ経済政策というように多面的・現実的な分析が含まれているわけです。²⁴⁾

E:経済学は検討すべき問いがたくさんあって、とても大変そうですね。その問題はまた改めて聞かせてもらおうことにしましょう。

●政治経済学者への「道」

Y:ところで、みんなはこれから本格的に経済学を学ぼうとしているわけだけど、人々が「どのようにして」経済学者になったか、に興味はないかな。新古典派、政治経済学等々の異なる経済学があって、どのようにしてそのうちのいずれかを専門家として選び取るか、ということ。別な言い

24) *Understanding Capitalism*は2005年に改訂第3版が刊行されたのだが、第1版（1985年）、第2版（1993年）と異なり、環境問題、グローバリゼーションといった現代の問題とのかかわりを重視し、理論的には情報の経済学を初めとする経済理論の最新の成果とも呼応する形になって“essentially a new book”になっている。第1版、第2版の副題“Competition, Command, and Change in the U.S. Economy”から“in the U.S. Economy”が削除されている。つまりここには、アメリカ経済がグローバル・エコノミーの一部に過ぎないという彼らの認識が現れている。さらに、内容の変更をつぶさに検討すれば、それはアメリカのラディカル派が、この四半世紀の間にどのように変貌したかを理解することができて興味深い。

方をすれば、経済学者になる〈きっかけ〉は何かということ。アレスティス (Philip Arestis) とソーヤー (Malcolm Sawyer) という二人の経済学者が編者になって作った興味深い本がある。2000年に第2版が出版されているのだけど、直訳すれば『異議を唱える経済学者の伝記的辞書 (*A biographical dictionary of dissenting economists*)』。ボールズ (Samuel Bowles 1940-) も寄稿しているのだが、次のような一節がある。

“The first year I taught introductory economics, one of my students asked me something like this: in view of the fact that scientific knowledge is freely available and people’s biology is relatively similar around the world, why is it some nations are so rich and others so poor? Another wanted to know whether this came about because ‘they’ were incompetent or because ‘we’ exploited ‘them’. I had no answer; my training in neoclassical economics had left me totally unprepared to address these questions.” (p.73)

ハーバード大学で経済学を教え始めた頃の経験を述懐しているのだけれど、ボールズはミクロ経済学を主として研究していて、テキストも出版しているほどである。でも、「豊かな国と貧しい国が生まれてしまう理由」を答えられなかった。自らの学んできたことの「狭さ」に気づかされて、自らを「再教育」することを決意するわけですね。同じように主流派の経済学に飽き足らなくなった若い経済学者たちが中心になって、アメリカのラディカル派経済学が構築されていくことになるわけです。²⁵⁾

E: こういうエピソードを知ると、ラディカル派の経済学もとても身近に感じられるようになるわ。

Y: 経済学を学び始めて、しばらくしてマルクスに到達するという点では

25) 宇沢弘文『経済学の考え方』岩波新書、1989年、同著『近代経済学の再検討』岩波新書、1977年などが参考になる。

置塩信雄も同じなんだ。ヒックス『価値と資本』²⁶⁾、ケインズ『一般理論』そしてハロッド『経済動態学序説』²⁷⁾を徹底的に研究するのだけれど、”I could not find a theory to understand the transition of social system itself.”と結論づけたわけです。²⁸⁾そして、当初は古臭く、時代遅れに思えたマルクスの『資本論』がじつはきわめて堅固な論理的基礎を備えていて、数学的にもきちんと証明できる命題が多いことを発見し、いまでは数理マルクス経済学と呼ばれる分野のパイオニアになっていったと言うわけです。

K：二人の経済学者がどうして主流派ではない経済学を目指すようになったのかを知ると、安易に新古典派だけを学んでいれば、事たれり、というわけには行きませんね。公務員試験に出題される経済学だけとか、就職に「役立つ」経済学だけというのも、なんかつまらない感じがしてきますね。

●経済学の任務

Y：だいぶ時間も経ったので、今日の二人を迎えてのミニゼミも、そろそろ終わりにしたいのだけど、最後に宇沢弘文さんの言葉を紹介しておこう。さて、この発言を読んで、真っ先に何を思い浮かべるだろうか？

「経済学の一番の原点は社会的正義です。人々が人間的な尊厳を失ってみじめな生活をしなければならないような状況に追いやられているのを見て、それをなんとかして救済し、あるいはそういうものをうみだす制度を変えていく、そういうことを考えるのが経済学の任務であるはずです。」²⁹⁾

26) J. R. Hicks, *Value and Capital*, 1939. (安井琢磨・熊谷尚夫訳『価値と資本』岩波文庫, 1995年)

27) R. F. Harrod, *Toward a Dynamic Economics*, Macmillan, 1948. (高橋長太郎訳『動態経済学序説』有斐閣, 1957年)

28) Kruger, M. and P. Flaschel, eds. *Nobuo Okishio: Essays on Political Economy*, Peter Lang, 1993, p.vii.

29) 『宇沢弘文著作集IV:近代経済学の転換』岩波書店, 1994年, p.335

K: NHKが放送して、大きな反響を呼んだ『ワーキングプア』の番組があったけど、働いても、働いても貧しい人たちが少なからず、この豊かな日本に存在しているわけです。ぎりぎりのところで「人間としての尊厳」を保っている人々。そんな人たちのことをまず考えました。

E: 最初の自己紹介でも話したけど、私は途上国の人々の暮らし、はっきり言ってしまえば貧困問題に関心をもっている。³⁰⁾ 日本国内ばかりでなく、海外にも目を向けたいと常々思っているの、一日一ドル以下で生活している人々を救う道をなぜ経済学はもっときっちり示せないのか、と。地球上のすべての国が市場経済化・資本主義化すればいいとは決して思わない。だって、市場の〈働き〉を考えれば、市場参加者全員が現実的に恩恵をこうむるとは考えられないから、…。それは今日学んだことの一つだと思ってます。

Y: 主流派の経済学のメッセージは、単純化してしまえば、「市場に任せておけばうまく行く」ということですが、本当にそうだろうか、という点から考え直さなければならぬことを現実が雄弁に語っている。でも、感情的、情緒的な対応は好ましくない。かつては、資本主義に代わる経済システムとして「社会主義」という回答がまがりなりもあった。それもすでに喪われた(?)と言われている。³¹⁾ さて、どうするか。市場、コミュニティ、

30) 貧困問題を論ずるさいにセンを忘れることはできない。例えば、A.Sen, *Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation*, Clarendon Press, 1981. (黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢饉』岩波書店, 2000年)

31) 「存続、再生産、移行」というときに、資本主義から社会主義への〈移行〉を想定するのが当然視されてきた。だが、最近では、社会主義システムから市場経済(資本主義)システムへの移行が問題になっている。さらに資本主義にも〈いろいろなタイプ〉があって、資本主義は〈一様〉ではないという認識が共有されつつある。イギリス資本主義を〈典型〉とするような思考法に反省が迫られていると言っても良い。この視点からの方法論的検討も求められている。例えば、M.Albert, *Capitalisme contre capitalisme*, Paris, Le Seuil. (小池はるひ訳『資本主義対資本主義』竹内書店新社, 1992年), R.Boyer, *Une Theorie du Capitalisme est-elle Possible?*, Odile Jacob, 2004. (山田鋭夫訳『資本主義vs.資本主義: 制度・変容・多様性』藤原書店, 2005年), B. Amable, *The Diversity of Modern Capitalism*, Oxford Univ. Press, 2003. (山田鋭夫・原田裕治他訳『五つの資本主義: グローバリズム時代における社会経済システムの多様性』藤原書店, 2005年)

国家等々の制度・組織がもっている長所、短所を虚心に把握し直さねばならない。³²⁾ そうした理論的作業を踏まえて、あらゆる人々にとっての“A Good Society”³³⁾をどのようにデザインできるのかを考えねばならない時期を迎えている。³⁴⁾

* * *

32) 例えば, Bowles S. and H. Gintis, *Recasting Egalitarianism*, Verso, 1998. (遠山弘徳訳『平等主義の政治経済学: 市場・国家・コミュニティのための新たなルール』大村書店, 2002年)。比較制度分析と呼ばれる新しい潮流も忘れてはならない。M. Aoki, *Towards a Comparative Institutional Analysis*, MIT, 2001. (瀧澤弘和・谷口和弘訳『比較制度分析に向けて』NTT出版, 2001年)

33) Committee on the Political Economy of the Good Society というグループがあって, *The Good Society*, というジャーナルを刊行している。創立メンバーのなかには, アロー (K. Arrow), セン (A. Sen) らの名前もある。詳細については以下のサイトを参照。http://www.bsos.umd.edu/pegs/index.html

34) 資本主義経済/市場経済をどうすれば組み替えられるかを考える際の, 参考として, 例えば, 佐藤良一編『市場経済の神話とその変革: <社会的なこと>の復権』法政大学出版局, 2003年, 内山節他『市場経済を組み替える』農村漁村文化協会, 1999年。

【読書案内（ABC順）】

（本文および注に掲げた文献以外で、〈もう一つの経済学〉を考へるときに参考になると思われる基本文献）

- [1] エコノミスト編集部編『対決する二つの経済学:近代経済学かマルクス経済学か』毎日新聞社, 1958年
- [2] 伊藤誠『資本主義経済の理論』岩波書店, 1989年
- [3] 伊東光晴『現代に生きるケインズ』岩波新書, 2006年
- [4] 菊本義治・佐藤真人・中谷武・佐藤良一『マクロ経済学』勁草書房, 1999年
- [5] 根岸隆・山口重克編『二つの経済学:対立から対話へ』東大出版会, 1984年
- [6] 置塩信雄『蓄積論（第2版）』筑摩書房, 1976年
- [7] 置塩信雄『資本制経済の基礎理論（増訂版）』創文社, 1978年
- [8] 佐藤良一「USラディカル派と新古典派」伊藤誠・野口眞・横川信治編著『マルクスの逆襲:政治経済学の復活』日本評論社, 1996年
- [9] 内橋克人『もうひとつの日本は可能だ』文春文庫, 2006年
- [10] 内橋克人編『経済学は誰のためにあるのか:市場原理至上主義批判』岩波書店, 1997年
- [11] 植村博恭・磯谷明德・海老塚明『社会経済システムの制度分析:マルクスとケインズを超えて』名古屋大学出版会, 1998年
- [12] 宇仁宏幸・坂口明義・遠山弘徳・鍋島直樹『入門社会経済学:資本主義を理解する』ナカニシア出版, 2004年
- [13] 八木紀一郎『社会経済学:資本主義を知る』名古屋大学出版会, 2006年
- [14] 八木紀一郎・宇仁宏幸『図解雑学 資本主義のしくみ』ナツメ社, 2003年
- [15] Bowles, S., *Microeconomics: Behavior, Institutions, and Evolution*, Princeton University Press, 2004.
- [16] Chavance B. *L'Economie Institutionnelle*, La Decouverte, 2007. (宇仁宏幸・中原隆幸・斎藤日出治『入門 制度経済学』ナカニシア出版, 2007年)
- [17] Goodwin, N., Julie A. Nelson, F. Ackerman and T. Weisskopf, *microeconomics in context*, Houghton Mifflin Company, 2005.
- [18] Hahnel, R., *The ABCs of Political Economy: A Modern Approach*, Pluto Press, 2002.
- [19] Himmelweit, S., R.Simonetti and A.Trigg, *Microeconomics: Neoclassical and Institutional Perspectives on Economic Behavior*, Thomson, 2001.

- [20] Wolff, R.D. and S. A. Resnick, *Economics: Marxian versus neoclassical*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1987. (平井規之・滝田和夫訳)
『二つの経済学：マルクス主義対新古典派』青木書店, 1991年)